

# 低酸素性脳症を持つ利用者との関わり

～共に過ごす機会を作るためには～

16CC19 道中裕貴

## I. はじめに

重症心身障害児施設は0歳～18歳くらいまでを対象とし肢体不自由と知的障害の両方を持つ日常生活全般にわたって介護を必要とする子どもの健康管理や、日常生活支援、生活指導を行っている。担当したA様の第一印象はリビングに横になっており、人と関ることが少なかった。関わりが少ないA様だったがとても素敵な笑顔で私の顔を見ていた。その笑顔を無くさないで人との関わりを増やしてもらいたいと思い介護計画を実施したため今回学んだことについて報告する。

## II. 実習先種別・実習期間

重症心身障害児・者施設

2017年6月26日～7月28日まで

## III. 事例紹介

氏名：A様 年齢：30代 性別：女性

障害程度等級：1種/1級

### 1. 家族構成・生活歴

A県B市出身。母・父・弟の三人である。

### 2. 入所に至った理由

生後2ヶ月で急性細気管支炎となり低酸素性脳症となる。また、始めはすりばいやトンボ座りが出来たが中学くらいから動きが減り寝たきりになる。(痙性四肢麻痺)、最重度精神遅滞となる。てんかん発作がある。現在、全身性強直代性発作は年に一回。

23歳より障害者療護施設に入所したが、27歳の時に肺膿瘍罹患を機に退所し2012年6月6日(27歳)のときにC施設に入所した。

### 3. 健康状態

てんかん発作 全身性強直代性発作 肺膿瘍罹患

### 4. 日常生活の状況

#### (1) 移動

車イス 可能な姿勢：仰臥位、腹臥位、右側臥位、左側臥位、右側腹臥位

#### (2) 身じたく

着衣：全介助 脱衣：全介助

(3) 食事

経鼻胃 頭部角度：中間位 姿勢：三角マット、仰臥位  
経鼻栄養

(4) 排泄

オムツを使用し全介助

(5) 入浴・清潔保持

入浴：全介助 洗面：全介助 手洗い：全介助 口腔ケア：全介助 入浴：特殊浴槽を使用

(6) コミュニケーション

言葉かけに「あー」「うー」などで返事をする。

快・不快の表出：ある。

物の音や楽器などの音に対して反応する。

5. 性格

周りを笑顔にさせる。快・不快がはっきりしている

6. 一日の過ごし方

リビングにジャイアントマットを敷き、その上に腹臥位や仰臥位になって一日リビングに出て職員の動きや他の利用者の事を見て、その場の雰囲気を見て楽しんでいる。

## IV. 介護の実際

### 1. 課題の発見と分析

余暇の過ごし方がリビングに出て周りの様子を見て過ごしていることが多く、人と関わる時間が少ない様子が見受けられた。その為人と関わる時間を増やし、コミュニケーションを図る事で生活の充実が図れるのではないかと。

### 2. 介護上の課題

日常生活において人と関わる時間を増やし楽しみを見出す必要がある

### 3. 介護目標

長期目標：退屈な時間を作らないために余暇時間を行う。

短期目標：共に過ごす機会を作る。

### 具体的な援助計画

A様の隣に横になり話しをすることで日常日常生活の中での楽しみを取り入れる。

- ① A様に隣に横になってもよいかどうかについて声をかけた。
- ② 確認したらA様に「横に失礼しますね」と声をかけ隣に横になった。
- ③ 横になったら、A様と同じ視線まで顔を持っていき、何を見ているのかを確認した。

- ④ 目で確認したら、A 様に「何が見えますか」「何を見えますか」と聞いた。
- ⑤ 聞いてみた時の反応を確認した。
- ⑥ A 様に笑顔が見られたら、一緒に笑顔になった。
- ⑦ 笑顔が見られたので、A 様に「そろそろ姿勢を戻しましょうか」と言って体位を戻した。
- ⑧ 体位を戻し終えたら、尿が出ていないかを確認した。
- ⑨ 確認し終えたら A 様に「ありがとうございました」と言って手の甲にタッチングをした。

## V. 実施及び結果

7月25日に実施し、周りの様子を一緒に見ていると終始笑顔になり私の方を見て笑顔になった。また、A様は周りの利用者を見ていて時折見詰め合っている姿も見受けられた。職員の動きもしっかり見ていており楽しそうにその場の雰囲気を楽しんでいた。A様は周りの雰囲気を見て楽しむが、他の利用者と言葉を交わさずに手が触れ合ってもそれだけで笑顔になり今までは、声を出して笑うことがなかったが他の人と関わる時間を増やしたらA様は声を出して笑っていた。その笑顔を見たときはA様の笑顔をこのまま維持するべきだと思った。

## VI. 考察

A様と共に過ごす機会を作ったことで、今まであまり人と関わる時間が少なかったA様に「人と関わることはこんなにも楽しい」と言うことを言葉ではなく隣に横になることで伝えられたのではないかと考えられる。また、人と関わる時間を増やすことで今まで見たことのない笑顔になり関わっていく時間が長いほど私がA様のそばから離れても探すようになった。私を見つけたときは終始笑顔で見つめていたことからA様自身も人と関わる楽しさを改めて見つけられたのではないかと考えられる。鈴木<sup>1)</sup>は、生活を広げるケアについて、音、メロディー、音楽、歌を通し聴くことの楽しさの重要性を述べており、A様は音に反応を見せていたことから、音を使ったコミュニケーションをすることで関係性がさらに深められたのではないかと考える。

## VII. おわりに

重症心身障害児・者と関わることで何に興味があり、何に興味がないのかとすることをしれたのではないだろうか。また、A様自身への課題も見つけられた。今回実施してA様について知れたことを忘れず、今後の将来に活かしていきたい。

## 参考・引用文献

- 1)写真で分かる重症心身障害児（者）のケア
- 2)鈴木康之（社会福祉法人鶴風会 理事）

舟橋満寿子（東京小児療育病院 特別顧問）

八代博子（東京小児療育病院 看護科長 認定看護管理者）